

山本健吉対談集

自然と藝術

角川書店

# 自然と藝術

山本健吉対談集

角川書店

# 自然と藝術

山本健吉対談集

昭和五十二年二月二十五日 初版発行

著者 山本健吉

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見二の十三  
●一〇二●東京三一九五二〇八  
電話 東京(三六五)セ二八六代表

印刷所 東洋印刷株式会社  
製本所 株式会社 宮田製本所

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

0095-875004-0946(0)

# 目次

西行と新古今 大岡 信・中西 進——七

芭蕉 尾形 仂・大岡 信——九

利休と芭蕉 井上 靖——一九

歳時記と日本人の生活 上田三四二——四三

日本人の自然観と文学 三好行雄——五五

神・自然・藝術  
岩田慶治——一九

文学と藝術  
中島和夫——二四三

方法以上  
中村草田男——二八一

現代の俳句  
飯田龍太・森澄雄——三五

あとがき  
——三六三



自然と藝術——山本健吉対談集——





西行と新古今

大岡  
信  
中西  
進

## 西行伝説について

中西 私、西行の歌といえますと、やっぱりどうも出家、遁世ということはどう考えたらいいか、なぜ出家したのか、そんなことが気になるのです。まず、雑談的に山本先生いかがですか。

山本 わかりませんね、それは。つまり学者の説を見てもいろんなことを言ってるでしょう。

失恋説もありますね。世をはかなんだとか。しかし、あの当時として、出家するというのはそういうのは異常じゃなかったんじゃないですか。人より早く、あの二十三くらいの若さで出家したというのは異常かもしれないけれども、三十代、四十代になって出家した人はざらにいるからね。ことにあの頃は末法の世なんです。

西行は非常に伝説の多い人で、何とでも伝説をつくり上げられるので、風巻景次郎さんなんか、高貴のやんごとなき方に対する失恋だったというふうに言っているでしょう。そこまで言い切れるかどうか、私はわかりません。

中西 源平盛衰記には「申すも恐れある上臈」に思いをかけて「阿漕の浦ぞ」と言われて——しばしば会っているとわさになるからやめろと言われて、それで出家して旅に出たんだという。もちろん一つの伝説でしようけれども。

大岡 ばくも西行の出家の理由についてはわからないですが、高貴の女性への失恋説というのは、西行の歌を読んでもみると、ちょっと魅力的な説だとは思いますが。あれは川田順さんあたり

から出た説じやないかと思いますが、確かに西行は恋の歌で、いい歌がありますね。「なかなか思ひ知るてふ言の葉は問はぬに過ぎてうらめしきかな」。相手の女から、あなたのお気持は私にもよくわかる、お察します、というふうなことをいわれて、そんなことはいってくれないほうがいい。なまじやさしい言葉をかけられて一層つらい思いをさせられるくらいなら、むしろ冷たく黙っていてくれたほうがいい、ということを書いてあるわけですね。

こういう恋の歌というのは、概念的、題詠的な「恋」ではなくて、相当もつれた恋愛経験をした人間でないとつくれない実感のこもった歌だと思ふのです。だから失恋説、しかもそれが高貴のやんごとなき身分の女性であったとすれば、ぼくはそれなりにわかるような気はしますね。

ただ、それも今のところ西行伝説の一つと考えるほかないし、まあ、足にすがって泣く子供を縁側から倒して家を出ていったとか、伝説といえは、一ぱいに西行に関してはあるし、要するに出家の動機はよくわかりませんね。

藤原頼長の『台記』、あれに出ているという記事を書き抜いてきたんですけども、康治元年三月十五日の記事（西行出家後二年）に、代々の勇士の家柄で、法皇に仕え、在俗のときから心を仏道にひそめていた。家は富み、年は若かったけれども、心は無欲で、ついに遁世の志を遂げたので、人々はこれを嘆美した。そう『台記』に書いてあるそうですね。

人々がえらいといつて嘆美したとありますが、確かに二十三の若さで、しかも富豪の家の出である武士が遁世したというのは相当な話題になったでしょうけれども、さつき山本さんがおっしゃったように、当時の世相としては、あり得たことじゃないかという気がぼくもいたしますね。

西行の家というのは、もとをたどれば藤原家の出で名門には違いないけど、佐藤の名を称した曾祖父の代以後は、宮廷での地位はかなり低いですね。権門以外の連中は、出世しようと思っても、しじゅう賄賂を使ったりへつらったりしなければならぬような時代だし、末法の世になつていてという意識も強くなつてゐる。しかも平家や源氏など武家の新勢力がぐんぐん抬頭してきて、宮廷内の皇位継承争いをきつかけに保元・平治の乱が起きる時代です。

そういう時代には、貴族のはしくれで歌道に志をもつてゐるような人間は、荘園から一応実入りがあるという保証があれば、そう深刻な理由はなくても、むしろ遁世して、数寄者として過ごしていく、風狂な現実觀察家、あるいは詩人として生きていくというほうが、かえつて生きやすかつた点もあるんじゃないかという気がするんです。俗世間のきずなを取り払われるだけ、かえつて行動の自由もあり得たかも知れない。

西行の場合、もちろんいろいろな苦しみはその後もあったはずですが、とにかく五十年にわたつて日本各地をじつによく歩いていますね。そういうことができる立場にあつたんだ、ということが、西行を考える上ではだいじなことのように思うんです。

### なぜ出家したか

山本『台記』の記事ですね。これは年が若いけれども、心に欲がなくて、人々が嘆美したということ。この記事がもし事実とすれば、ぼくはいつそう失恋じゃないと思うのですよ。失恋だ

つたら嘆美できないでしょう。

大岡 そうですな。むしろ冷笑的なひそひそ話になりますね。

山本 心に欲がないということは、やっぱり色欲が原因でもないということの意味しているかもしれない。ぼくはあの年若くして出家に踏み切った決意を人が嘆美したんだと思う。女の問題か何か介在していたら、そう嘆美されることはなかったんじゃないかと思えますね。(笑)

大岡 どうも業平みたいな話題の証拠もないようですからね。

山本 ただ、芭蕉の場合を考えるのですよ。芭蕉が伊賀を出奔しますね。あれもいろいろ原因がいわれて、失恋説とか何とかあるんだけど、やっぱりあれと同じで、あの場合も後世の芭蕉の連句なんかを見ますと、実に女の経験が豊富にあると認めるよりしようがないような句がいろいろあるでしょう。それは西行に題詠とは言えない恋愛の歌が非常に多いのと似たようなケースで、だからどちらも失恋したからだろうということとは出てこないような気がします。

大岡 失恋ではなくて、むしろ失恋の歌をつくって楽しむほどに恋をよく知っていたということもあり得るかもしれませんね。

中西 伝説というのは、むしろ逆に造形される面がありますからね。西行の恋の歌でも「葉がくれに散りとどまれる花のみぞ忍びし人にあふ心地する」という「忍びし人」とか「弓張の月にはづれて見しかげのやさしかりしはいつか忘れむ」といった、ことに後の方の歌なんか、ゆうに伝説を作り上げることが可能ですね。

さっきの『台記』の嘆美ですが、「嘆美す」というふうにいえば、やっぱり一つの大きな事柄

だというふうに考えられますね。そう考えるか、あるいはもつとごくあたりまえのことだと考えるか、その辺についてはどうなんでしょうか、出家って。いまのお話では、わりあいありふれた事柄だということですか。

**山本** わりあいありふれたことだけれども、やっぱりある決意は必要とすることでしょう、とにかく世の中を捨てることですから。

**中西** 『台記』では「人之を嘆美す」と書いているけれども、実は嘆美したのは、頼長だった、少なくとも頼長サイドといえますか、この時の射弓の会に集った両院以下の貴紳たちにとつての嘆美だったことは大事なように思うんです。この時頼長は二十五、六で西行とほとんど同年齢です。それで内大臣である。そうした人間から見れば、西行は論理の外にあったんじゃないか。それを目の前に見せつけられた頼長の心がわかるような気がします。もちろん「嘆美す」だから、頼長にも理解できたし、彼自身の中でも可能な世界ではあったんでしょうけれども。その点では時代の風を考える必要がありますね。

**山本** その前からそういう気配は、まわりの人は感じていたかもしれませんがね、出家するんじゃないか、踏み切るんじゃないかということは。

**中西** このとき西行は右衛門尉だから、位でいうと七位なんだけれども、これはずっと宮仕えをしていても出世の見込みはないんでしょうか。

**山本** あれは北面の武士でしょう。北面の武士で、まあ六位まではなれるのかもしれないけれども、五位になるのには、やはりある飛躍を必要とする。五位になったら一応あっちこっちに出

入りできるわけですね。六位、七位じゃ、地下の者なんで、やんごとなき方に親しくものを言いかわすことなど、普通にはできなかったような気がしますね。

中西 家柄としてはいいわけですね、これは俵藤太の子孫ですから。同じ時、平清盛も北面の武士なんだけれども、現実に出世できないとすればやっぱり……。

山本 ある程度できないことはないと思います、出世できないから、出家したとは考えたくないのです。「家富み」だから、やっぱり名門で、ことに佐藤氏というのは俵藤太の藤原系ですから、全国にいろいろ一族が散らばっているでしょう。その点は、全国旅行した場合にいろいろ便宜はあったと思いますね。

大岡 そうでしょうね。

山本 二回くらい奥州に行っていますね。

大岡 平泉の鎮守府將軍藤原秀衡は遠い縁続きになりますね。近ごろはやりの放浪とか漂泊とかというところ、すぐに乞食坊主的な放浪を考える風潮がありますが、そういう眼で西行を見るのは間違いで、行く先々で、彼を手厚く迎えてくれる人もいたように思われるし、一族の縁をたどれば、日本の各地、とくに関東、東北に、たくさんの方々の富豪の同族が土着していますね。そういうことは考えておく必要があるような気がします。

山本 ですから西行の出家と、それから芭蕉——これは出家はしてないんだけど、やっぱり形としては出家みたいなもので、あの場合比較して、どちらも旅の詩人と言われるわけですけど、ずいぶん条件が違うんだと思いますね。



西行のほうは実に自然ですよ、出家して、そして旅人になったということが。芭蕉のほうにはある構えがあります。それからもう一つは、西行は乱世に出家しているのですけれども、芭蕉は太平の世に隠者生活を送ったんだから、いくらか世間と違ったことをするという無理な姿勢があるような気がしますね。西行はないです、非常に自然ですよ。

中西 芭蕉の場合には、何か体制的な自分への重圧みたいなものがあって、それが体制から一歩はずれることによって、もつと自分のめざす俳諧なら俳諧の道というものを求めていこうとする姿勢があるんでしょうね。ところが西行の場合にはそうじゃなくて、生来の必然性のようなものがあるんで、むしろ出家によって精神の自由を保有できるんだというふうな形なのかもしれないですね。私は、また「源平盛衰記」ですが、ここに「中ごろのすき者にて」と書いてある、これがすべてを語っていませんか。業平以来の「数寄者」でこれこそ非体制者であり、風流者であり、好色者である。それでいて生硬でけ高い志向者ではないわけです。これは一概に伝説のことばとはいいい切れない、事実をいい当てていることばではないでしょうか。それが伝説となると好色者イコール失恋者ということになっちゃう。

大岡 出家については、失恋説というのはロマネスクな意味で、ぼくは興味あるんですけど、現実にはおそらくこういうこともあったんじゃないかというふうに思うのは、彼が仕えたのは徳大寺家で、徳大寺の家から鳥羽院の妃になった待賢門院が出ておりますね。だから待賢門院につながる縁で鳥羽院の北面の武士として仕えたわけだけれども、もう一人美福門院という非常に若くて美しい妃が、鳥羽天皇の寵愛を受けた。